『スポーツを体育する』の理念

(両者の概念と関係に関する原理的研究)

佐 藤 和 兄*

(昭和44年10月24日受付)

The idea on the utilization of sports as the physical education

(Theoretical study about the concepts and the relationships
between sports and physical education)

Kazue, Sato (Komazawa University)

In this, I aimed at inquiring the modern definitions of the concept of "sports" and "physical education", and endeavored to make clear the conceptual differences and the relationships between them.

I am so happy if the thesis may, to some extent, contribute to the practices of sports activities and physical education activities.

標 題 の 趣 旨

—『スポーツを体育する』の理念—この標題からは、一見なんのことか、不可解に思われよう。そのため、せめて標題の趣旨についてだけでも、いささかの説明を加えておく。こんにち、特に直接の体育指導者から「スポーツとは何か」および「体育とは何か」という共通の疑問が強く発生している。これは現実の体育指導面における直面せる障害から、種々の矛盾感と困惑感を覚え、必然的に生まれてきた切実な声とみてよい。

さて、この「何か」という問いの中には、「如何なる本質をもつものか」と「如何なる実践をすべきか」との二つの疑問と要求が包含されている。すなわち、存在をして存在ならしめる本質概念と、実践的な価値概念の二つの概念要素のことが問題にされているわけである。現実の具体的な活動は、スポーツ現象にせよ、体育現象にせよ、

もちろん、それなりの存在観念と価値判断のもとにやっているのだが、複雑微妙な社会状況下だけに、目の現象面をいかに打開するか、とかく困惑することが多くなつたことに他ならない。

そこで、本論^(註1)は「スポーツの概念」と「体育の概念」について、徹底的な再検討を加え、さらに「スポーツと体育との関係性」について、原理的な探究を試みようと思う。

「必然性(法則性)は当然性(規範性)を生む」^(註2)といわれる。この試みを通して、スポーツ・体育の活動面に、新しい方途と生き生きした息吹きが与えられるならば幸甚である。

なお、標題の「スポーツを体育するの理念」の真意は、本論全体を通じて、おのずから解明されるものと信ずる。

「活動素材」と「活動実践」の概念

「スポーツ」「体育」なる単一用語には、二つ

(註1)「本論文」は、「日本体育学会」における「原理部門」で、過去6回にわたって発表したものを、要約したものである。

(註2)「必然性」とは、自然・人事を含めて一貫した大自然の法則性・真理性(「かくある」事実の状態)を意味し、「当然性」とは、それを人間中心に応用した当為性・価値性(「かくすべきである」の行動の方向・規範)を意味したものである。

* 駒沢大学教授

の内容が内包されている。二つの内容とは「活動素材」(運動素材)と「活動実践」(運動活動)である。スポーツの立場からは「スポーツ素材とスポーツ活動」体育の立場からは「体育素材と体育活動」である。

そこで、まず、この二つの内容要素について、一応、再吟味してみよう。日常用語でいう「スポーツ」「体育」には、この二つの内容要素が多少とも包含されて、殆んど同意義に用いているようである。だが、結論からいえば、この二つの内容要素は、厳密には明確に違つたものである。すなわち、「活動素材」と「活動実践」とは、概念的には峻別すべきものである。まず、このへんの思考から論旨を進めよう。これは、きわめて大事な問題である。何故なら、この認識的混同が、「スポーツと体育」の概念構成上においても、実践行動上においても、致命的な核心を担つていとみなされるからである。然らば「活動素材」と「活動実践」とは、如何に区別すべきものだろうか。

まず、「活動素材」から眺めて「スポーツ・体育」にあてはめると、いわば「運動文化財」に相当する。運動文化財といつても、ピンからキリまで多種多様だが、一度でも人間生活に登場して、ある程度、定着したものは、その発生动機、特徴、利用のいかんを問わず、すべて「運動文化財」とみなしてよいであろう。さて、「運動文化財」であるが、人間がどんな動機、立場で、どんなやり方をしようが「財そのもの」の原質、原型なるものは、そうやたらに変わるものではない。また、仮に人間が全く関係しなくとも「財そのもの」は客観的存在として認められるものである。これを「自動車」に例えていうと、性能・形態の変化は年々多少あるにしても「自動車」そのものの原質・原型・名称は変らない。「自動車」はいぜんとして「自動車」である。また、同一の「自動車」をとりあげても人間が使つても使わなくとも「自動車」は客観的存在として変らないものである。さらに、何時・何処でどんな使用をしても、「自動車」そのものの姿は、全く変らない。このような意味である。このように「活動素材」(運動文化財)は、人間の関係程度いかんを問わず、客観的存在として「不変性」と「一様性」をもつてい

る。然るに「活動実践」となれば、そうではない。「スポーツ・体育」でいえば、「スポーツ活動・体育活動」である。

「活動実践」は、必らずそこに対象あるいは媒介となる「活動素材」がなければ成立しないということと、必らず人間がなんらかの関係をしなければ成立しないものである。この場合、たとえ人間がどんな関係をするかは概念にはなんら支障のないことである。どんな活動展開になつても「活動実践」は「活動実践」である。だが、「活動実践」の内容は、「人」により「処」により「時」によつて決して一様でなく、千差万別の様相、千変万化の形態で、きわめて「可変性」と「多様性」をもつものである。それは人おのおのによつて個人差、環境差があり、種々様々の姿で活動が展開することは、誰しも認めざるを得ない。以上の考察から明確にしておきたいことは、「活動素材の概念」と「活動実践の概念」とは、混同せずに劃然と区別すべきものであるということである。

「活動実践」の性格と範疇(カテゴリー)

「活動実践」とは、活動素材と人間との関係行動であることは前述のごとくである。これをスポーツでいえば、スポーツの活動実践は、いわば「スポーツ活動」である。そこで、「スポーツ活動とは何か」となれば、「その時の人間の生命活動が、多少ともスポーツ事象と関係して働いている関係行動一切を含めてスポーツ活動という」これが、いわゆる「スポーツ活動」の範疇(カテゴリー)である。

ここで「関係行動一切」ということを、いまま少し解説しよう。それは、そのスポーツ活動が、どんな目的でどんな欲望満足の表現であれ、それは問題にしない。また、生活の主要内容であれ部分的内容であれ、それも構わない。また、一時的現象であれ持続的現象であれ、それにも拘らない。さらに、それが直接的関係行動であれ、間接的關係行動であれ、それも包含して考える。これらはすべて広く「スポーツ活動」なる範疇(カテゴリー)に入れてみなすことになる。

なお、前述の「直接的関係行動・間接的關係行動」について、若干、説明を補足しよう。「直接

「関係行動」とは、本人自身が直接、四肢五体を動かして運動をしていることである。「間接的関係行動」とは、本人自身が直接、運動するのではなく、他人の運動しているのを、はたからなんらかの格好で観照している、いわゆる間接的な行動を指している。間接的関係行動となれば、きわめて多種多様で少しばかり他の生活行動とダブル場合もある。場合によつては、喫茶店や茶の間におけるテレビ観覧にも通ずる。もちろん、その対象はスポーツ事象になつていなければならない。このへんのところを「音楽活動」に例えると、ステージで自ら歌唱したり、演奏したりしているだけが音楽活動をしているのではなく、客席にいてそれを鑑賞している人々も、それなりの姿で音楽活動をしているとみなすのである。「スポーツ活動」も同様である。

このように、「スポーツ活動」とは、その客体となるスポーツ事象なる「素材」と「人間」との一切の関係行動を意味する。もちろん、そこに関係程度の濃淡の差こそあれ、きわめて広い活動範疇になる。

以上の考察から、必然的にいわれることは、「スポーツ活動」なるものは、人の年齢、強弱、地位を問わず、生きている限りにおいて、すべての人間に開放され、なんらかの形態ですべての人間がやり得るというわけである。

これが「スポーツ活動の概念」として、まず明確にしておきたい。この場合、その活動の好悪論・是非論・善悪論…などの評価問題は、概念外のこと、全く別個の立場（人生の目的観・価値観）から改めて検討すべきものである。

「スポーツ・体育」の概念的相異点

運動生活を考える場合、その「運動それ自体」とその活動の対象・媒介となる「運動素材」とは認識的には全く違つたものである。これを「スポーツ・体育」でいえば「スポーツ財とスポーツ活動」「体育財と体育活動」とは、概念的理解としては混同せずに区別すべきものである。これについては前述したことである。

そこで次に、以上のような前提基盤のもとに「スポーツと体育」との概念的区別を明らかにし

ようと思う。

結論からいえば「スポーツと体育」とは、その呼び方が違うごとく、はつきりと違つたものである。その要点は、その活動過程における「運動素材の相異」ではなくして、その活動方向を示す「目的価値の相異」である。

これこそ「スポーツと体育」との区別をする核心的要点である。これを敢えて端的に言えば、『スポーツは目的的には「多元的性格」をもっているし、体育は目的的には「一元的性格」をもっている。』ということである。

それでは、その根拠・理由について、いささか言及を進めよう。

ここで、まず「運動文化財」なるものを、再度検討するに、きわめて多種多様で、どれもそれぞれの発生动機をもっているにせよ、すべて人間生活のなんらかの必要性から登場したものである。だが、ある程度、承認されて定着したものでも、運動文化財は、人間自身に対しては環境的存在・相対的存在となる。このように客観的存在としての運動文化財は、それぞれの特異性とそれなりの傾向性をもっていることは否定できないが、一種の「白紙的存在」でいかようにも着色できるものであり、それ自体としては、直接、人間の意志を左右する力はない。逆に、人間が働きかけ関係したときに限り意味をもち、人間の活動内容いかんによつては、あるいは「スポーツ財」あるいは「体育財」あるいは「労働財」あるいは「芸術財」…となり、その呼ばれ方も違つてくる立場になる。

これは、「運動文化財」なる活動素材は、たとえその発生动機がなんであれ、スポーツとか体育とか、はじめから人間の活動意識や方向まで絶対的に決めていないというわけである。

この事から必然的にいわれることは、「スポーツと体育」との概念的区別を云々する場合、その対象・媒介になる運動素材のみを注目し問題にして、そこからスポーツと体育の分割を図ろうと論理を進めることは、本質的に無理があるといわなければならない。客観的・環境的存在としての運動素材の立場は、前述のごとく人間の思考活動を規定する根源力はなく、「実践的境界線」がないものであるからである。してみれば、「スポーツ

と体育」との相異は、そこに傴らく運動素材の相異を問題の焦点にするのではなく、それと関係し、それを取り扱う人間の主観的実践内容、活動方向の相異の問題にならざるを得ないことになる。換言すれば「スポーツと体育」との真の認識は、運動材料、運動種目などの便法的分類の区別ではなくして、実は生きた実践活動面である「スポーツ活動と体育活動」という二つの範疇(カテゴリー)における目的・方向的区別の相異点に帰着する。このあたりが認識問題としてきわめて大事なところで、そこに概念の混同があつてはならない。

そこで「スポーツ活動」について、改めて再吟味してみよう。スポーツ活動は俗に「娯楽」を目的として行われる運動活動であるといわれる。これは明らかに初めから、人間の目的性を真向からふりかざしたスポーツ活動の概念規定とも思われる。当初のアマチュア観からは、さらに語意が強く「純粋娯楽」以外の活動はスポーツじゃないとまで決めつけている。「純粋娯楽」人間は、生活は、いつたいこのように単一に出来ているだろうか。これは明らかに「存在概念と評価概念」「真理と価値」「法則性と当浮性」の混同であり、おそるべき抽象的観念論である。(アマチュアリズムに関しては、いろいろ論議の余地があるが、この紙面では割愛する。)(註3)

現実社会に生動する一切のスポーツ活動は、人間欲望の微妙性と生活環境の複雑性とが絡みあつて、そんな生やさしいものではない。実態は、慰安・社交・親善・虚栄・娯楽・保健・美容・興行・訓練・名手・商談・修養・趣味……など。いろいろな生活目的・欲求満足への手段として行なわれている。もちろん、活動過程で体験する遊戯性・娯楽性は他の一般生活動作よりは比較的内在していることは否定できないにせよ、それはあくまでも比較的であつて千変万化の活動内容と方向をもつのがスポーツ活動のあるがままの実態である。

このように「スポーツ活動」は現に「在る人間」

の機能的・開放的活動で明らかに「多元性」をもつものである。だが、たまたまスポーツ活動が体育活動と併行したり合致したりすることはあり得る。(これについては後にも触れる。)

だが、「体育活動」となれば、その文字が示すごとく、何はともあれ人間自体に焦点がしぼられ、人間形成の方向をとることははつきりといわれる。人間形成に焦点が当てられない限り、正に致命的で体育活動とはいわれない。それは今後「在りたい人間」への課題的・集中的活動で明らかに「一元性」をもつものである。この場合「いかなる人間形成をめざすのか」「その方法はよいかどうか」などということは、概念外の問題で直接には関係がない。とにかく人間形成の作業を第一目的とするというわけである。

人間中心に言えば、「スポーツ活動」は人間から外へ向かつての種々の遠心的・放射的活動であるという意味で「多元性」であり、「体育活動」は人間一点に向かつての求心的・集中的活動であるという意味で「一元性」であるというのである。

以上のことが「スポーツと体育」との概念を明確にする認識的要点である。

「スポーツを体育する」の意味

「スポーツと体育」との概念的区別は、そこに出没する運動材料の区別ではなくして、実は、実践面である「スポーツ活動と体育活動」との概念的区別こそ合理的であることは前述したとおりである。

その比較概念を敢えて示すと、『スポーツ活動とは、身体的活動素材を媒介にしての種々の生活価値追求の多元的・放射的作業である。』『体育活動とは、身体的活動素材を媒介にしての人格価値追求の一元的・集中的作業である。』といえよう。(註4)

いずれも、身体的活動素材を主として媒介にすることは同じで、その場合、それがいかなる運動文化財であれ、それは問わない。とにかくそれらを自由に駆使して、一方は「人間からの方向」を

(註3) 俗にいう「アマチュアリズム」の基底となる人間観・世界観は「普遍妥当性」を欠くという基本的見解から、かくいう。

(註4) 「人格価値・生活価値」両者は、その現象的方向・様相こそ異なれ、「価値体系」そのものは、人間中心の立場をとり、同様である。

とり、他方は「人間への方向」をとるだけである。

このように「スポーツ活動」の方は、自己開放の表出行動・生活欲望の達成行動となるから、いろいろの欲求、環境の変動性が絡んで常に好ましき人間形成と一致するとは限らない。否、むしろ「体力」「健康」「生命力」とか「人間性」とか…つまり「人間自身」に対しては逆にマイナスに働くことも当然あり得ることである。一般の生活諸動作より比較的には、体育的要素を多く含んでいるのはもちろんだが、実際にはいろいろの悲劇性と不幸性が孕んでいるわけである。放任しておく人間から遠ざかるだけで遂には断絶し分裂して收拾がつかなくなる可能性もある。

そこで「スポーツを体育する」の気構い、態度が大切になる。それでは「スポーツを体育する」とはいかなることであろうか。

既に、スポーツ活動はあくまでもスポーツ活動であつて、決してそのまま「即体育活動」ではないことは述べた。ただし、状態によつてはたまたま体育的活動と併行し、また合致することもあり得るということも述べた。スポーツ活動は生動せる生活現象なる故、いろいろのねらいで行なわれるのはよいとして、スポーツ活動自体をより有効適切ならしめるには、当然強い体力なり精神力なりが必要である。その為のいわゆる「基礎体力づくり」の作業などは、明らかに人間主体に目を向けた体育的作業で、スポーツ活動と併行した体育的活動とみてよい。また、スポーツ活動の前後における準備運動・整理運動なども体育的活動である。ただし、それはあくまでも、さしあたり「スポーツ活動の為の体育的活動」で人間それ自体に終止する全体的な意味における体育的活動ではないことを附言しておく。

こんどは、スポーツ活動と合致した体育活動とは何か。それはたまたまスポーツ活動の第一のスローガン、直接のねらいを、体育的ねらい、すなわち「人間形成達成」「人格価値追求」においた場合は、その時の活動は、りつぱに「即体育活動」とみなしてよいだろう。学校における体育授業で

は、それを受講する側の心理状態はどうであれ、少なくとも立前としては、あらゆる運動活動を真向から体育活動としてやつていることはいうまでもない。

このように、「スポーツ活動」の性格的概念の立場からは、「体育的活動」はその部分的位置を占めることになる。ただし、留意すべきは「スポーツ活動」の価値的実践の立場からは、広い意味における人生の「体育的活動」の中に包含されてしまうことになる。

いうまでもなく、スポーツ活動をただまんぜんとやるよりは、体育的活動と併行した合致させてやるのは、より有効的・価値的であるのはもちろんである。

ここで、いま一つ考慮すべきは、体育的意識をもつて、いわゆる「体育活動」としてやれば、常に人間主体にプラスになるかといえは必ずしも断言できない。形式や名目の上では「体育活動」であつても、そのやり方いかんによつては、実質的に「反体育」の活動になり得ることも覚悟しなければなるまい。それが、非科学的・反法則的なやり方をすれば、かえつてマイナスになるからである。だから、体育的意識だけでは、すべて事足りるとするのも早計である。下手な体育活動は上手なスポーツ活動より劣るということもあるを、確と銘記すべきである。もちろん、体育的意識を持つことは大事であるが、大事なのはあくまでも科学的・合理的・法則的・合目的的活動^(註5)であるべきだということである。そのためにこそ、技術的にも理論的にも、諸種の学問的研究が要求されることはいうまでもない。

だが問題は、単に現象面の目前の方法的原理のみに拘泥している間は、まだ本物有効な活動は発展しない。部分的な方法的原理も、もちろん大事であるが、「より価値的で安定した効果」を望むならば、もつと視野を大きく人生全般から見直してやらなければならない。

「スポーツを体育する」という意味は、必ずしも、「スポーツ活動」をすべて「体育」という堅苦しい旗印しを掲げてやれというのではない。

(註5)「合目的的活動」ここでは、目前の現象的活動が、真の意味において、人生社会あるいは人類共通の意願・目的に即応しているか、どうかという大きな立場からいう。

「スポーツ活動」は「スポーツ活動」として自由にやつてよいのであるが、それは目前の近視眼的活動に流されず、常に広い人生、社会の全体面からながめ、調和性と有機性のあるリズムある活動でありたいというのである。だから「スポーツを体育する」とは、換言すれば「スポーツを価値的に生活する」ということである。

思うに、「スポーツ活動」といえ「体育活動」と

いえ、人生という広い地盤からみれば、いずれも局所的な生活行動で、究極は人生全般の目的価値に帰・還元されるべきものである。それ故、それらの活動の評価云々の件に関しては、根源的には人生全般からの「普遍妥当性」のある「価値体系」から、静かに見直す必要がある。かくして、「スポーツを体育するの理念」も、さらに明快に、さらに適確に、理解されることになるろう。